



不知火海・球磨川流域圏学会

# NEWS LETTER

- 平成 30 年度 大会／現地見学会案内
- 平成 29 年度第 2 回現地見学会報告
- 寄稿「インドネシアへの旅」
- 八代の魚の話
- 球磨川流域の山歩記 第 5 回・五木頭地周辺の山
- 近況報告「80 の手習い」
- 書評 考古学って意外と面白い  
- 木崎康弘著  
「肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々 -  
肥後と球磨の考古学史 -」

時松雅史  
坂井米夫  
亀井由美  
高平雅由  
上淵徳光

上村雄一



# 24

2018 年 4 月 15 日発行

平成 22 年 4 月に始まった球磨川の荒瀬ダム撤去工事が今年 3 月終了し、坂本町では流れる球磨川を見ることができます。撤去を機に今坂本町では活発な町おこしが始まっています。



平成30年度

# 大会・現地見学会

平成30年度大会及び第1回現地見学会を以下の要領で実施いたします。詳細は、追ってご案内させていただきますが、皆様の予定を調整の上、ご参加いただきますようお願いいたします。

## ① 大会 6月2日(土)

場所：水俣環境アカデミア  
熊本県水俣市南福寺6-1、TEL/0966-84-9711

■ 総会 10:30 ~ 12:00

■ 研究発表会

ポスター発表 12:00 ~ 17:00

口頭発表 13:30 ~ 17:00

■ 基調講演

「佐敷城と水俣城から梅北の乱を検証する」  
正岡裕子（水俣市教育委員会）

■ 研究発表

1. 「大皆伐時代の到来」 沢畑亨（愛林館館長）
2. 「桜野園のお茶と人」 松本和也（お茶の生産者）
3. 「海・山・街をつなぐ ～水俣食べる通信の取り組み～」 諸橋賢一（水俣食べる通信編集長）
4. 「光と環境制御の技術で自然環境再生」 園山 芳充（株式会社アグリライト研究所 代表取締役）
5. 諫早湾の底生生態系における水銀濃縮  
ワッチラ・ジャインガム（熊本県立大学環境共生学部大学院）
6. 「環境汚染物質に対する動物の感受性の種差」  
平野将司氏（熊本高等専門学校八代キャンパス）

■ ポスター発表

- ・「佐敷干潟にアサリの高密度個体群を戻す」  
松岡佳子（熊本県立大学大学院・環境共生学研究科）
- ・「菊池川の河口域の環境の季節変化がヤマトシジミの個体群動態に与える影響」  
立石明（熊本県立大学大学院・環境共生学研究科）
- ・その他



水俣環境アカデミア



■ 懇親会

6月2日(土)

会場：喜久屋

水俣市湯出1402、電話0966-68-0211

※宿泊先は、個人予約となります。懇親会会場である喜久屋も宿泊可能です。  
推薦1：喜久屋  
推薦2：ゲストハウス Tojiya  
熊本県水俣市湯出1561-1、  
電話0966-68-0008) <https://tojiya.net/>



喜久屋



ゲストハウス Tojiya

## ② 現地見学会 6月3日(日)

■ 集合時間、場所：新水俣駅 9:45 ※新水俣駅到着下り 9:45

■ 見学コース：新水俣駅 10:00 → 11:00 愛林館棚田 → 寒川水源（昼食） → 久木野の伐採地 → 15:00 茶畑 → 16:30 新水俣駅（解散）

■ 参加費：2000円（昼食代、ガソリン代等含む）

■ 問い合わせ先：0966-69-0485（愛林館 沢畑）



茶畑

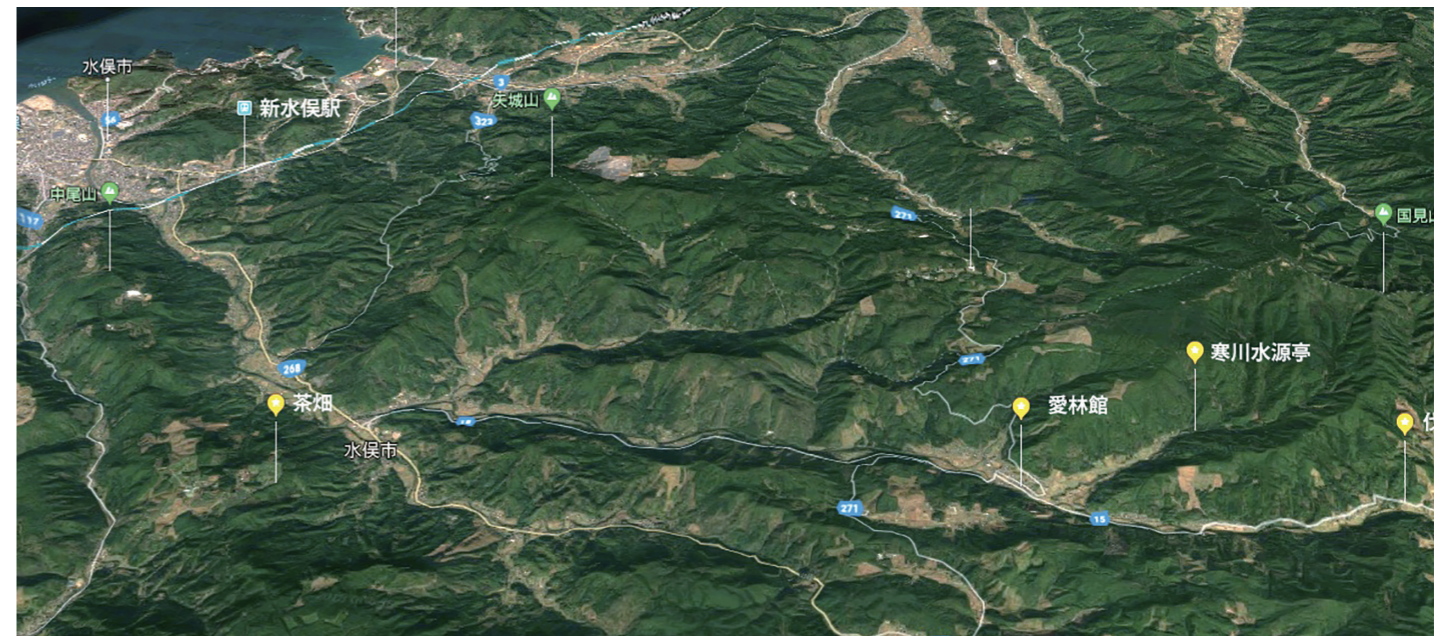
伐採地



愛林館



寒川水源亭





10月15日(日)、平成29年度第2回の現地見学会が宇城市小川町で行われた。小雨の中、14名が参加、JR小川駅に集合した。先週の暖かい気候から一変して当日は肌寒い気候となり、体調を崩して欠席する会員もいた。

まず、我々は小川駅に近い川尻(かわじり)にある砂川旧河川跡池を訪れた。ここは砂川の流路変更により形成された所で、現在は長さが100mを超える池となっている。本学会でも今年度「残したい水ものがたり」に選定された場所である。この土地は私有地であるため事前に許可を得ての見学であった。また私有地ということが幸いして、人の出入りが少ないため自然がそのまま残されており、多様な水生昆虫が生息しそうな環境になっていた。

次に向かったのは、出水(でみず)地蔵水源である。由来は安政5年(1851)とそれほど古くはないが、湧水が当時流行した疫病に効果があるということで、球磨や薩摩からも水を求めにくる人が絶えなかったと伝えられている。小川町特産の一つにかんざらしや白玉粉があるが、これはこの湧水でさらし製造されたのがはじまりとされている。水源の隣に旧火の国食品の工場跡がある。試しに一口飲んでみるとくせがなくやわらかい。飲みやすい湧水であった。

次に海東方面へ向かいつつ、県

道32号沿いにある舟岩(ふないわ)に立ち寄った。由来は時化の時に船をつないで難を逃れたことから、このように呼ばれるようになったそうである。また慶安の頃、石見の国から来た黒龍丸という船が難破し、多くの乗員が水死したという哀話から、「石見岩」とも呼ばれているそうである。

次に32号沿いにある塔福寺前で車を停めた。塔福寺には元寇で蒙古軍と戦った竹崎秀長自筆による海頭(海東)社と塔福寺に贈った置文と寄進上の2通が伝えられており、小川町唯一の国指定重要文化財となっている。現在、この古文書は県立美術館に保管委託されている。当日は葬儀のため関係者が準備していたので寺を外から眺めるだけに終わった。この頃から雨が小降りとなってきた。

次に舞鳴(もうしぎ)文殊堂を訪問した。ここは加藤清正が朝鮮出兵の際、従軍した舞鳴の郷土が朝鮮京畿道から帰還記念に同地の文殊堂から文殊菩薩を勧請して祀ったことが由来とされている。この神社には参拝者向けに100円で拝聴できる放送設備がある。さすがに文殊様が祀られていることだけあって受験生の参拝者が多いようだ。ただ、「文殊様は仏様なのになぜ神社にあるの?」という素朴な疑問の声が参加者から上っていた。明治以前、神仏



砂川旧河川跡池



地蔵水源



舟岩



塔福寺



峠の石清水

習合は一般的だったからそのまま継承されたのであろうか。静かな境内には熊本地震で倒壊した石灯籠の石が積み上げられたままになっていた。完全復旧にはまだまだ時間がかかりそうだ。文殊堂へ向かう道の傍らには柿木の実がたくさん熟して落ちていた。

次に文殊堂からさらに山道を進んで、峠の石清水(標高:265m)に着き、そこで昼食となった。峠の石清水は平成9年(1997)に肥後水資源受護賞受賞、平成22年(2010)に熊本県平成名水百選に認定されている。管理は蕨野峠の石清水保存会が行っており、同敷地内にはトイレも設置されている。この場所に着いたときは、雨が強くなり、石清水の家屋に避難して昼食の弁当を食べた。弁当は来る途中に「海東の駅」で購入した。大きなエビフライが入っていてそれなりに美味しかった。

次に石清水の地から引き返して、前述した竹崎秀長の墓を訪問した。ガイド役の佐藤伸二先生から、「古くから竹崎秀長の墓として伝えられてはいるが、学問的に証明されていないわけではない」との解説がなされた。この墓の周囲にも他の墓が多数あり、江戸時代のもも散見された。隣接する平原公園内には秀長の前進一途の心意気を表した東郷平八郎の書が刻まれた記念碑が立っている。

ここで全員の記念写真を撮った。この敷地内を歩いて気づいたのは畑の土が砂っぽいということだった。近くに「山砂採取反対」の看板が立っており、山砂の採取をめぐる争いがあることがわかった。この地域を見ていてこの流域の河川名が砂川となっていることもようやく納得できた。

最後に小川町旧商店街上町地区にある塩屋を訪問した。塩屋の裏手にある駐車場では、偶然にも獅子舞を奉納する地元民と出会って、獅子舞を披露してくれた。ちょうどこの日は阿蘇神社の秋祭りの日だった。塩屋は明治39年(1906)年に建てられた土蔵白壁建築の木造2階建ての建築物である。平成11年(1999)に所有者の岩崎氏から町内の「風の会」が借り受け、修復した後、平成13年にまちづくりの拠点としてオープンした。我々は1階奥の座敷に招かれ、ここで売り出し中のれんこん饅頭とお茶をいただいた。そして小川町の歴史について、小川歴史を学ぶ会員の菅本宣正氏と佐藤伸二先生、さらに今回の記録係の時松から事前に配布された資料をもとに約1時間にわたって説明がなされた。話が終わったところで今回の見学会の予定は終了し、午後3時ごろ小川駅で随時解散した。

解散後、つるさん・堤先生・酒井さん・斎藤さん・時松の5名は旧

商店街の砂川を挟んで南側にある吉本地区に向かった。目的は甘味処白玉屋新三郎本店である。ここは「あめ屋」という屋号で江戸時代から続いている老舗である。ここで少し時間を過ごしてから再度の解散となった。

今回の見学会では菅本宣正氏から終始目的地的においてわかりやすいコメントをいただいた。ガイド役を務めていただいた佐藤先生とともに深く感謝申し上げる次第である。



塩屋



塩屋屋内



竹崎秀長の墓の前で集合写真

# インドネシアの旅

寄稿

坂井米夫



バリ島の寺院で筆者

八代に来ていた留学生2組が国で結婚式を挙げることが決まり招待を受けこんな機会がなければ現地の結婚式に参加する機会はなからうと出席を決めました。1組は新郎新婦とも八代にいた留学生です。もうひと組は新婦が八代の留学生です。期日は2017年9月30日と10月1日です。

バリ島に長期滞在した経験がある友人からアドバイスを受け、向こうでのホテル、タクシー等の準備をしました。飛行機の予約は留学生にお願いしました。

9月26日いよいよ新八代駅を13時45分発ばんべいゆ号で熊本空港へ、

15時55分発ジェットスターで成田へ出発成田17時45分着。初めての成田は広くて大変だが時間はたっぷり。出発のエアアジアの受付

場所確認後、時間までゆっくり食事、ついでに酒まで飲んで良い気分だったのが最大の失敗、時間前一時間と想って10時頃受付に行ったらもぬけの殻?時間間違いだった。血の気が引いてしまった。スケジュール表を見たら間違いなく20時55分発とあるが前日11時前結婚する子からメールが入る「お父さん今から出発します。気を付けて来て下さい。」同じ飛行機で行くんだなと思ってしまった。それが頭にインプットされて10時55分発と勘違いしてしまったのだ!酒を飲んでいて確認を怠ったのが一番いけなかった。4人いて誰も気づかなかったのだ。それからが大変、エアアジアの受付で次のフライトを調べてもらったがネット受付しかなかったというが、年寄りばかりでネット予約が出来ないから、どうしてもここで予約してくれと押し切って、明朝8時15分発バリ直行便の予約ができた。

あくる朝時間通りにフライト、LCCの座席は狭かったが空席が多かったので二人で3つの座席を使ったので快適に過ごすことが出来ました。でも飛行機の中でRP(ルピー)だけしか使えなかったのには困った。たまたま春のインドネシアの留学生の卒業式に両親が来たので阿蘇観光に連れて行った所、記念に20万RP(2000円ほど)をもらったのを持ってきていたのを飲んで飲み

物などを買うことが出来た。

午後2時20分バリ着、入国審査にいっぱい並んでいるが、一か所ガラガラの所があるよく見ると60years oldと書いてあるのを見つけて、60歳以上の高齢者特別待遇で通過できました。(インドネシアでは高齢者だ!)空港からの出口付近にはお客の名前を書いた看板を持ってたくさんの迎えが来ています。私の名前を書いた看板を必死に探し、日本人らしい女性を見つけてほっとしました。迎えの女性は移住15年位の大木さんで、予約していた日本語のできるタクシーの運転手と一緒にした。

早速市内観光に出発。まずびっくりしたのは若者のバイクの多さと運転の仕方、隙間があればどこからでもバイクが入ってくる。神がかり的でもあった。友人はそれを評し「信じる者は救われる。」と言ったくらいです。ものすごい混みようだったのですが、夜中遅くまで同じように続くそうです。低所得者の若者たちは、露天で食事する習慣で夜は道路端にある露店が賑わっていました。街中に信号機が少なく交差点では左折右折直進の車がどうやって通るのか?と疑いたくもなりますがうまいことお互いに譲り合い割り込み流れていきます。この町では高齢者は道路を渡るのも大変であまり家から出ないそうです。何度か大量の車の

間を老人が必死に横断する姿を見ました。

バイクは3人乗りまで認められていますが、4人乗りも多くあります。中学校の近くを通った時出てくる子供がバイクに乗っていたので「何歳から乗れますか?」と聞いたら「18歳ですが、警察もいないし中学生は皆バイクに乗ります。」との返事、留学生から聞いた話では、「インドネシア人は大丈夫ですが、外国人は捕まります。お金になるからです。」との事。子供が多いので小学校は低学年は昼まで、高学年は遅くから始まると聞いたこともあります。

インドネシアは世界最大のイスラム国家ですが、バリは珍しくヒンズー教の島で昔イスラム教に追われてバリ島に来たそうです。観光の島らしく食べ物もアルコールもあまり制約がなく食べ物には困りませんでした。

通りには寺院と同じような構えの家が沢山あり金持ちは大きな門を作るので寺院との見分けがつかませ



バリの石窟遺跡

ん。有名な寺院を2か所行きました。入るときには腰巻(サルン)をして入りました。日本のような大きな建物があるわけではなくヒンズー教は自然を大事にします。ちょうどアグン山が噴火した時で、運転手は「怖いけど神聖な山です」と言っていました。



バリのバロンダンス

バリの映像でよく見る伝統舞踊の公演を2か所見学。料金は1000円程度でどこにもあるそうです。バリ中部のテガラランの棚田は日本の棚田のような所に観光客を呼び込み棚田を見ながら食事を楽しめるのどかな風景でした。レストランの経営者は日本人で、任されている日本の女性が親切に対応してくれました。

田舎に行く道道路わきには水田が広がりますが植え付けばかりの稲と収穫中の稲もあります。仕事柄収穫の様子が気になり見学してきました。5、6人で作業をしていて、鎌で刈り取る人、モミをたたき落とす人、それを風選している人などです。日本では江戸末期に使われ始めた千歯扱ぎも使わないのでそれ以前

の農法かと思います。私が見たことがない作業風景でした。



サヌールのホテル

バリの宿泊は一部屋単位なので、ヨーロッパからの家族連れが長期滞在で多く来ていました。サヌールの海岸では赤道近くでも涼しい風が吹き食事をしながら生演奏を聴いてリゾート気分満喫でした。こんな所で長期に滞在すると日本人の気質として余りにもゆったりとしていて不安になりそうです。何か所かで食事をして支払の時、4人分で100万RPといわれて一瞬不安になりますが、計算すると約1万円です。



サヌールのビーチ

ホテルやレストラン、コンビニ等で働くのはどこも若い人ばかり、ホテルやコンビニ両替、ショッピング

センターなどにも多くの守衛がいる。日本では考えられない風景でした。ホテルのトイレはまあ許容範囲でしたが、街中では左手でふき取り手を洗うので、トイレがピチョピチョです。私達のホテルのシャワーはお湯が出ず、バリは思ったほど暑くないので冷たく感じる時もありました。

29日飛行場に行く前に、是非見たかった現地の市場バザールに行きました。露天にバナナなどの果物、肉や魚、衣類、ヒンズー教で毎日飾る花等現地の人たちの生活市場です。

大きな長屋の様な所に魚肉屋が沢山あります。30度近くの気温で冷蔵庫もなく、エアコンもありません。入るときは異臭さえします。勇気を出して入ると切った魚や肉が台の上に並べられ、いろんなゴミが、通路に散乱していました。日本の戦後の市場も似たようなものだったと思います。露天のものは食べない方がいいと言われるのは納得でした。

いよいよバリ10時15分発でジャワ島のスラバヤに移動一時間の飛行でスラバヤに着いたら10時15分(時差1時間)新郎のチャーターしたワゴン車でホテルに1時間余りで到着外気温は40度近く、すぐに久しぶりに再会した新郎の家族と一緒に食事して、夜には新婦の家族と食事、ジャワ島ではイスラム教の関係

でコンビニにもホテルにもアルコールが売っていないと聞いて残念だといっていたら、千葉から来ていた日本人の方が屋上にビアガーデンがあるらしいと聞いて一緒に屋上で霞んだ空気の中でビールで乾杯をしました。夜の風は気持ちよかったです。



1日目の結婚式

30日朝10時頃教会で結婚式のあと、午後6時頃からホテルで披露宴でした。



1日目の披露宴

新郎の親族200人新婦の親族200人、新郎新婦の友人100人の盛大な披露宴でした。二人の人柄か日本からも40人近くが来ていたと思います、宗教が違うと結婚出来ないそうで、身分証明書にも宗教が書いてあるそうです、それは「世界の常識日本の非常識」だそうです。新

婦は仏教でしたが結婚と共にキリスト教に改宗しました。

結婚式では家族が中心で一番上の方に陣取ります。そして全員ドレスと蝶ネクタイで着飾ります。華やかな結婚式です。ありがたい事に家族と同じ待遇をしてもらいました。

結婚式が終わって帰ったのは10時近く、あくる日は次の結婚式のためにホテルを4時出発なので、この日もビアガーデンと思っていたのがキャンセル。

朝4時ホテルを出て空港に行つて6時45分発のLion Airを準備万端で待っていたのですが、時間になっても案内がない、聞きに行ったら1時間遅れるらしい。遅ればせながら着いても着替える時間がなからうと連れの女性は和服に早めに着替えた。こんな事もあるかと思っていたら2時間たって周りも騒ぎ出した時、日本語で綺麗ですねと声をかけてくれる現地の女性がいた。ホテルに勤めていて、京都で着物を着たことがあるらしい。彼女の話ではよく遅れることがあり、仕事で迷惑かけたこともあるので急ぐ時には利用しないそうだ。

結局3時間遅れで出発してジャカルタ空港から出たのは12時過ぎになってしまった。携帯で花嫁には連絡がついていたが披露宴はもう始まっている。出口で花嫁の父親の友人が私と彼女の写真を掲げて待つて

いてくれた。彼女の卒業式の二日後に柳川ひな祭りに行った時の写真だった。気温は38度ジャカルタから高速に乗ったが、ジャカルタの高速は渋滞が酷い。料金所で料金が手渡しなので料金所を通るたびに渋滞する。後輩の留学生の両親が日本に来た時、車が止まらずにインターを出るのを不思議そうにしていたのを思い出す。ETCは日本のが一番性能がいいらしい。2時間余りでどかな田舎のイスラムの結婚式場にやっと着いたが、着飾った人たちがぞろぞろと出てくる。丁度披露宴が終わった所だった。申し訳なかった。



イスラムの花嫁と母親

写真撮影が始まっていて、久しぶりの再会でこれまで以上に綺麗な姿を見ることが出来ました。両親とミススクールの自慢の妹と、八代にいた時に、生まれたと聞いて恥ずかしいと言っていた20歳以上離れた弟、新郎は同じ大学に通う先輩留学生。家族はイスラム式のドレス姿と蝶ネクタイ、華やかさがいっぱい。前日とは全く違う雰囲気でしたが幸せ感と同じ。



花嫁の家族

夜には家族と地元の料理屋に食事、ここでも当然アルコール無し。二人は大学院卒業後、国に戻って大学の教授になりたいそうだ。大学教授は10万円くらいの給与で、家事のお手伝いさんを雇って生活できるらしい。遠い日本で夢に向かってがんばってるなと思います。

ホテルに帰ったら、レストランでビールが飲めると聞いて喜んで乾杯。やっぱりお祝いにはアルコールが付き物と思うのは日本人。あまり信心深くないが仏教でよかった。

2日家族と一緒にホテル8時出発でジャカルタ空港へ、二人と日本での再会を約束して午後1時発のエアアジアで中継地のバンコクへ飛び立ちました。ここでも空席がありゆっくり出来ましたがお米がまずくばさばさでした。

バンコク16時20分着でバンコク発が23時45分なので空港でゆっくり買い物食事、買い物は円でも出来ました。しかしパーツに両替していないので食事に行った時、店員に「円OK?」と確認したら「OK」

と言われて食事が終わり円で払おうとしたら、「NO」と言われて慌ててしまった。幸い連れがカードを持っていたので何とか払ってもらったが、カードの必要性を実感した出来事でした。成田へ3日朝8時頃着いて見慣れた光景でほっと一息、午後1時15分の成田発熊本行きの受付まで自由に買い物、国内だから安心と思ったら、連れが財布の入った荷物を置き忘れてしまった。急いで探したら届けてあったらしく無事戻った。私は旅の間パスポートを無くさないように首にかけてコピーをバッグの中に入れておきました。

熊本に着いて八代直行バスばんべいゆ号の出発までたっぷり一時間、地元に戻った余裕なのかロビーで寛いでいたら、危ない所で遅れそうになった。この旅では何度も波乱があったが、最後の皆の言葉は「4人一緒だったので楽しかった。」でした。こんな機会を与えてくれた留学生に感謝です。



家族と一緒に



魚市場のせりの様子

仕事上の勉強も兼ねて、平成29年3月から可能な限り毎朝、八代の魚市場のセリへ足を運んで、まもなく1年が経過するところである。最初は、どの季節にどんな種類の魚があがるか？それぞれの魚の値段はどのくらいか？ということに興味があったのだが、次第に、どの地区の漁師がどんな漁法でどんな魚を獲っているのか？ということに興味を持ち始め、たまには朝日が昇る前に漁船に同乗させてもらい、漁獲の様子を見せてもらうこともある。

八代海の湾奥部に位置する八代市は、干拓や埋立で干潟が減ったと言えど、現在でも広範囲に干潟が広がり、浅瀬の場所が多い。また、球磨川等の河川からの栄養分供給により、植物プランクトンも同じ八代海の別海域よりも格段に多く、このような海域条件から、植物プランクトンを餌料とする様々な種類の魚が見られる。比較的浅い場所では、小型定置網が設置され、潮により多魚種が網に入る。その他にも、刺網、はえ縄、流し網等、漁業者によっては

季節によりいくつかの漁法で漁業を行う。これまで、漁具・漁法の図説でしか知らなかった地域の漁法等を実際に見たり、漁業者から仕掛けの説明を受けることにより、ずいぶん理解できるようになってきた。理にかなった漁具を用いて、経験をもとに漁業を行う漁師はあらためてプロフェッショナルであり、魅力的な仕事だなと感じる。

八代市では、以前はアサリ漁が水揚量の大部分を占めていたが、平成23年の大量へい死以降、アサリ資源の回復が思うように進まず、漁業者は現在、アサリ以外の水産物の漁



八代の青うなぎ

獲に収入の多くを頼っている。春はサヨリ、コウイカ、チリメン、夏はウナギ、アナジャコ、アジアカエビ、アユ、秋はタチウオ、ガザミ、冬はヒラメ、コノシロ、ブリ、マガキ、青ノリ…。ある漁師さんによると、「約2ヶ月ごとに魚の種類が変わる」とのこと。この中でも、八代で獲れるウナギは青ウナギと呼ばれ、海水が混ざった河口域に生息する天然のウナギで、大変美味しい。漁期の4月から9月の間、魚市場のセリで

は高値で取引されており、全国からの受注も多いと聞く。干潟に生息するアナジャコ等を餌にするので、豊饒の海 八代海が産み出す八代の特産品である。

朝獲れたての魚が、数時間後に市内の鮮魚店に並ぶ環境はとても恵まれている。たまに仕事帰りに鮮魚店に寄り、これは、あの漁師さんが獲ったコノシロだ！と分かるようになると、とても楽しい。1匹まるごとの魚を購入して家でさばいて食べる時間の余裕がないので、下処理をした魚やお刺身を購入することが多いが、たまには1匹まるごとを家でさばくと、魚の骨の構造が見えて、とても興味深い。今、挑戦してみたいのは、ヒラメの5枚おろしだ。わが家の子供達も魚を見て、触りたがるし、興味を持つと骨を嫌がらず食べてくれるようになった。

毎日の魚市場を見ていると、安く買い叩かれている魚種もあり、魚価の向上は今後の課題である。漁業者の海での仕事を目の当たりにしているからこそ、もっといい値段がついて欲しいし、後継者が育ち、八代の水産業が今後さらに盛んになって欲しいと願う。



春先に獲れるイダコの煮付け



連載

## 球磨川流域の山歩記 第5回 五木村頭地地区周辺のピークハント

高平雅由



なり、必然的に体重も増加して山に登るのが億劫で仕方が無い。しかしいつまでも引きこもっているわけにも行かず、この記事を書くことを理由に久々の山登り行ってきた。まあいきなり標高差のある山に登る自信も体力もないのでかねてから気に



頭地・道の駅から舂方山を見上げる

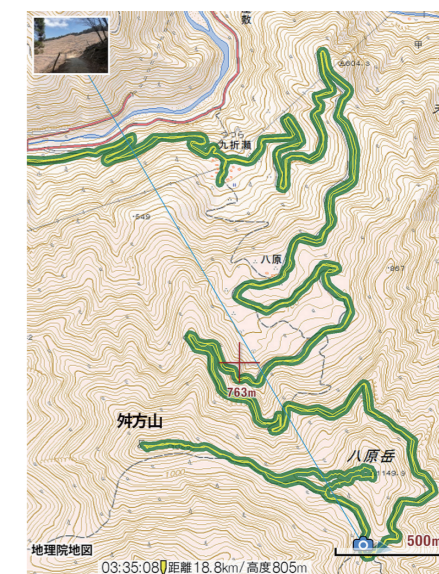


九折瀬集落の観音堂とイチヨウ

桁形山へは道の駅の裏に登山口があるのだがここからだと700mの標高差を登らなければならない。が今の体重ではちょっとしんどい。調べてみると頭地から川辺川を少し遡り、九折瀬という集落を通って八原集落、さらに林道を走れば八原岳

すれば楽に二つの未踏峰を踏めるじゃないか。しめしめ。

道の駅でルートを確認し山用の



GPS アプリの記録を開始。車で舗装された山道を 5 分ほど登り九折瀬集落にさしかると「九折瀬観音堂・九折瀬観音堂のイチョウ」という立て札が現れたので寄ってみることにした。室町時代から祀られてきたと



いう観音座像を納めたお堂と幹回り 6m はあろうかというイチョウの古木があった。お参りをしていると中年の夫婦が登ってきた。親戚の家を訪ねてきたとのことだった。話を聞いているところは 2012 年に発生した土石流で何軒もの家が被害に遭っ



たこと。「空き家ばかりですよ」。そういえば屋根と柱だけで壁と床のない家が何軒かある。あたりには大きな黒い土嚢が積み上げられたまま。防災工事が進んでいたがこの村が災害以前の姿に復興する力があるとは思えない。歴史のある集落がそっと消えようとしている。

春の花が咲き誇る九折瀬を後にして八原集落を過ぎ所々未舗装の林道をおそろおそろ車を走らせること 20 分、標高 1050m の鞍部にたどり着いた。車を走らせて来た東向きの斜面は軒並み伐採中。日曜日なので人はいないが鞍部で重機に進路をふさがれここから歩くことになった。

鞍部を越えて西向きの斜面に出たがここも伐採中。鹿ネットに挟まれたむき出しの作業道を陽に焼かれながら歩く。とても 4 月とは思えない。最初に目指す八原岳の山頂は

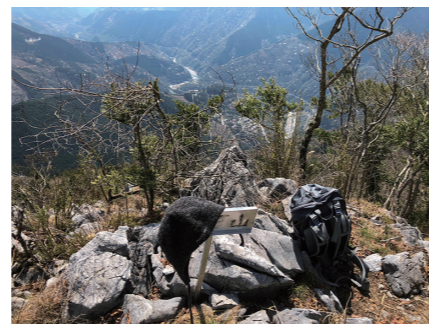


鹿ネットにしがみついで登る伐採斜面の上に見えるのだが鹿ネットに阻まれて登り口がわからない。歩いている内に山頂はどんどん後ろに遠ざかっていく。八原岳と柘形山の鞍部まで行けば両山頂を結ぶ尾根道の登山道に出くわすはずだけど、そこから引返してピストンというものも味気ない。ええ鹿ネット沿いに直登だ。直登という言葉には蛮勇を奮い起こす魔力がある。その魔力に引きずられながら標高差 100m、石灰岩のガレがカラカラと音を立てて滑り落ちていく急斜面を四つん這



八原岳山頂からいで登る。相変わらずバカな山登りをしていると思う。所々に鹿の糞がある。しかし馬はこの斜面は登れないだろうな。

八原岳山頂 (1149.8 m) は電波塔と鹿ネットの際にあり、東側は杉林で展望はない。伐採のおかげで開けた西側の斜面の下には深い溪谷を穿って流れる川辺川と下谷の集落があった。九州脊梁の巨大な山塊が今にものしかかって押しつぶしてしまいそうに見えた。



舂方山山頂 柘形山 (1085m) へ。

矢原岳からならかな尾根伝いに柘形山へ向かう。さっきの急登が嘘みたいな穏やかな道だ。30 分ほど舂方山山頂。ここでは人吉から来たという中高年の 10 人ぐらいのグループが昼食をとっていた。道の駅から登ってきたという。みんな元

気だなあ。話をしながら今年の山の状況を仕入れる。グループを見送った後、一人で昼食。ポットの湯で久々のカップ麺。これが美味いんだなあ。山頂からはちょっと霞んではいたけど南にあさぎり町の白髪岳、西に仰鳥帽子山、東に高塚山、市房山と展望がいい。



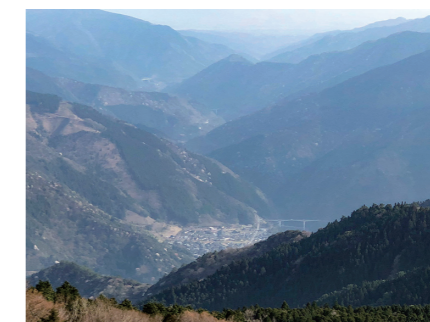
苔むした石灰岩の白髪岳山頂 白髪岳 (五木) 1244m

一休みして時計を見るとまだ 13 時を回ったばかりだ。せっかくここまで来たんだからもう少し未踏峰を踏んでおこうということで、川辺川を挟んで反対側の白髪岳 (五木の) と国見山へ登ることにした。どちらの山も山頂近くまで車で近づける。ピークハントにはもってこいの山だ。作業道を歩いて車まで帰り、頭地から県道 25 号線を八代方向に走り、白滝公園物販所から右の山道に入り込み飯干川沿いをガンガン登っていく。途中一台の車にも会わない。約 1 時間のドライブで白髪岳の登山口に着いた。登山口付近は杉の木に覆われて薄暗い。山頂付近は苔むした石灰岩がゴロゴロしていてヤマシャクがちらほらと蕾を付けてい

る。ちょっと京丈山に似た趣がある。展望はまったくない。登山口から標高差 80m、距離にして往復 400 m 位か。30 分かけて往復。山登りという気はしないけどここも熊本百名山の一つ。

国見山 (1253.4m)

休む間もなく車で 15 分走り国見山の登山口へたどり着いた。時計を見ると 15 時半を回っている。一人で山に登るときはこの季節でも 16 時には登山口を下りていようというぐらいで計画を立てるので、山頂まで 700 m という標識を見たときはちょっと迷ったがここであきらめるわけにもいかない。30 分登って



国見山山頂から頭地を望む山頂に届かなくても引き返そうと決めて登始める。白髪岳ではちょっと曇っていたがまた晴れてきた。それに自然林の森は明るくて傾斜も緩い。距離はあるけどなんとかかなりそう。

と思っていたら山頂直前で山の様子が変わってきた。石灰岩を積み上げたピーク。八原岳の直登は別にして今日初めての「山登り」という印象。岩や木につかまって身体を引



今回の全行程。全行程 72.9km。7 時間の山歩き。

き上げる。登り切ると石灰岩の細尾根。アセビやヒカゲツツジの灌木が茂っているので怖くはないがかなり狭い。その細尾根をしばらく行くと三角点があった。定員 2 人ぐらいの狭さだけど展望は今日登った山の中で最高。360 度の展望だ。ちょっと霞んではいるがここからは頭地地区もよく見える。霞んでなければ八代まで見えそうな勢い。ここはいい



国見山の山頂に咲いていたコブシの花



木崎康弘『肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々  
—肥後と球磨の考古学史—』

書評 考古学って、意外に、おもしろい  
上村雄一

山頂だなぁ。登った甲斐があったというもの。時間をちょっとオーバーしていたので急いで下山。

今回は体調を考えて山歩きというよりは無粋なピークハントに徹して、結果4つの山頂（それも全部

熊本百名山）を踏むことが出来た。いい山歩きだったけど、九州山地の山のご多分に漏れず、どの山も鹿の食害から低層の植物は殆ど生えていなかった。また大規模な伐採が行われてる箇所が多かったのにも驚か

された。折しも山は春。自然林の山肌には桜の花が咲き誇っていて、むき出しにされた伐採地と対照的だった。

 80の手習い  
近況報告 上淵徳光



少年の頃、大きな病院などに入院すれば音楽も聞けて、外の風景等眺めながらゆっくり本も読める。そんな優雅な時が欲しいなど想像した記憶がある。

昨年11月下旬かかり付けの病院から、ふとした理由で公立病院に送り込まれた。検査の結果 胆管狭窄症一糖尿病 とかで治療が始まった。次の検査で大腸がんの診断。経験者曰く「寝ている間に夢の様に終わる。あとは回復を待つばかり」早く手術をとの勧め。

12月初旬手術 腹の真ん中を上下に15cmズバツと切り裂きホッチ

キス留め、手術は順調に夢の様に終わった。が、翌日、翌々日麻酔が抜けて傷みが始まった。腹中にグルグル、ギューッ、ドーン、ギューッ様々な痛みが繰り返し襲って来る。1週間は痛みを耐える日々であった。

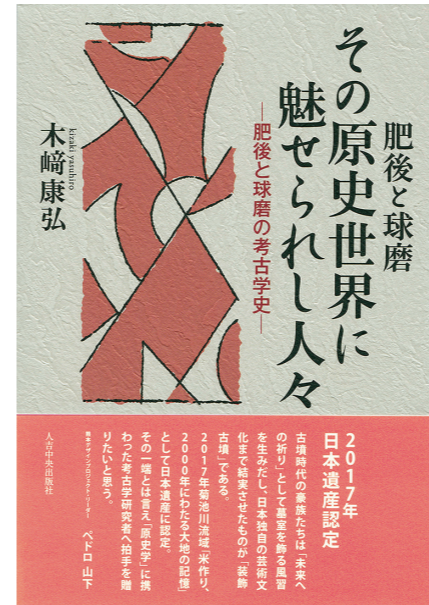
やがて正気の入院生活。雪降る夜明けの小川など眺め、雪解けの川面に遊ぶ鴨の群。

病院の個室は洗面まで6m、トイレ迄8m。食事は、上げ膳下げ膳。気分次第で僅かな読書。体動かぬ生活に突入。体が鈍る、足がなえる「3日入院すれば寝たつきになる」とか。こりゃいかん。よし歩け、廊下を階段を。多少の迷惑もかまわん。とにかく歩け歩け。この間にNHK大河ドラマ「西郷どん」の本は、何とも茫洋としても楽しく読んだ。3週間で暮れの27日退院

正月はやる事がいっぱい。あれもこれも、だが何も進まず。厳寒1

月31日、突然左胸部が痛む。肺炎とかで強烈な痛みの中入院。日々痛みは減り回復して2週間で退院できた。さあ、忙し忙し、やらねばならん。だが体がなまって動かない。動かぬ日々はつらい。それでも春は来る。

3月5日、再度左胸が痛み、救急車で送り込まれ、痛さに耐えてうなりながらの入院。いい歳をして体の五臓六腑とは、糖尿病、血糖値、肺炎、がん等々、ほぼ無知なるものの俄か勉強……。とは言っても見せられる映像、現実の痛みを知っても回復しなければならん。春の晴れ日の病院暮らし、やり切れん。だが1連の治療して2週間、桃の花咲く庭に帰って来た。さあ忙し忙し、野菜の種まき、山菜の総萌出。フキ、シシウド、ワラビ、オランダガラシ、筍、山が待っている。



本学会員の木崎康弘さんが、近著『肥後と球磨 その原史社会に魅せられし人々』（人吉中央出版社）で第39回熊日出版文化賞を受賞した。祝意を表したい。現在4本の書評が発表されていて、いずれも高い評価を同書に与えている。同書については触れるべき点が多数あるが、ここでは2点ほど述べる。

嘘のような本当の話

本書は、熊本・球磨の考古学がどのようにして形成されてきたのかを主題にする専門書であるが、普通の専門書にはない、小説のようなドラマ性をそなえていて、実におもしろい。無機質な学説史でなく、学説を担う人々に注目しているからだが、人間こそが歴史をつくるという筆者のスタンスをそこに感じる。たとえば、土佐の考古学者・寺西正路がなぜ球磨地方に関心を寄せるよう

になったか、どのルートを利用して球磨に入ったか、球磨でどのような作業をしたか、球磨川をどのようにみたかなどのエピソードを紹介しているのは一例である。角田政治の話もおもしろい。彼は、球磨地方の考古学成立の立役者で、そのために人吉を訪問したのだが、その直前に、人吉駅裏の大村古墳群を別の人物（済々覺教論、下林繁夫）が発見されるという信じられない事件が起きている。あるいは、日本考古学の確立者・濱田耕作（京都帝大教授で、「日本近代考古学の父」とされる）が人吉訪問中に土器を割ってしまい、土器の所有者（犬童時）から叱れたう

第39回 熊日出版文化賞 贈呈式



京都に帰りましたら、同じものをお送りいたしますので、お許しください」とう、嘘のような発言をした話も登場する。「同じもの」などありえないに決まっているのに、近代考古学の父がそう弁明したというのだ。当然ながら犬童はいつそう激怒する。あるいは隠れ念仏で有名な高沢集落（球磨郡球磨村）の話も印象的である。縄文式土器、磨製石器などとともに、アワビ・ハマグリなどの

貝類が発見されたというのだが、それ自体、ドキとする。同集落は山中のなかの山中というべきところで、アワビ・ハマグリとはすぐにはむすびつかない。そこに調査に向かった坂本経堯の話はいつそう面白い。「あへぎ」ながら、「段の峠」を超え、肥薩線・白石駅（芦北町）についているものには可笑しくもある。維新政府の命令にしたがって、遺跡がどのようにして地方政府、中央政府に集約されていったかの話も物語的である。有名な江田船山古墳の出土品の発見者「平民池田佐十」が「代価総計金八十円」を受け取るまでの経緯は、「宝物出てきた夢」をみたことが発見のきっかけであったという嘘のような内容である。美術教師の福原袋郎が副葬品の太刀を雄略天皇の頃と比定していたことにも触れている。これには、本当に、驚いた。  
**肥後・球磨の人間はアイヌ人、それとも熊襲？**  
考古学の成立史は、「日本人は人種的には何人なのか」の論争史でもあって、幾重にも興味深い。単一民族論を考古学は最初からとっていないのである。現代の目からみるとき論拠の濃淡はあるが、偏見にとらわれない研究精神（科学的精神）がはじめから考古学者にはそなわっていた。



日本の考古学の出発点をどこにおくかについてさまざま意見がある。本書は通説にしたがいエドモンド・S・モースの大森貝塚の発見を出発点とする。そして、そのときから、人種問題が争点になって、その論争は現在の学説にも影響を与えている。アイヌ人でもなく、日本人でもない、先住民が日本にいたというのがモースの結論で、その後、アイヌ人説、コロポックル説がくりかえし論点に

なっていく。こういう議論に接すると、『魏志倭人伝』の日本人像がコロポックルに似ていることに思考回路がつながっていく。著者は、アイヌ人論を「縄文人」と読み替えていくことを通じて、人種論争を集約させているが、それもまた刺激的である。縄文人から弥生人への「進化」という図式に対して、東日本の文化＝縄文文化、西日本の文化＝弥生文化という区分論が有力にあるからである。そ

れはまた、大和民族による他民族の征服という皇国史観とも重なっていった点にも注意を要する。考古学者は自由な発想の人々であったが、それでも、筆者によれば、戦前考古学は皇国史観の影響から完全には自由でなかった。本書には、その痕跡が記録されている。

(うえむら ゆういち 月刊『くまがわ春秋』編集主幹)

本稿は、月刊「くまがわ春秋」第17号(人吉中央出版)掲載の拙稿「考古学はドラマである」を一部改訂・短縮したものである。

## 「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売



### ■最新号 vol. 10 No.1 (2016年) 1,000円

- 【原著論文】九州球磨川の荒瀬ダム撤去による河川環境の変化の地球化学的考察  
石賀裕明・林優子
- 【原著論文】八代海の生物多様性の検討—市民調査法による周回調査  
榎本輝樹・青木美鈴・中川雅博・佐々木美貴  
多留聖典・森啓介・つる祥子・鈴木孝男
- 【研究ノート】球磨川流域における自然再生に向けた取り組みについて  
荒木和幸
- 【研究ノート】八代漁協におけるアサリ増殖の取り組み  
藤原成治
- 【流域いろいろ】球磨川萩原堤のはねの残存状況と保存活用の提案  
梅木氣・椎葉将人・溝口稔也・磯田節子・森山学
- 【流域いろいろ】球磨川の舟運—舟止事件—  
上村雄一
- 【平成27年度研究会発表記録】流域生態圏管理の考え方について—「森林環境と流域生態圏管理(小山滋編著)の視点—  
小山滋

※創刊号 vol. 1 (CD販売のみ), vol. 2～vol. 9の在庫もあります。

■申込方法：下記宛に必要な部数、お名前、ご住所、送り先をお知らせ下さい。

- ・E-mail：tsuru.shoko@gmail.com (総務：つる祥子)
- ・facebook「不知火海・球磨川流域圏学会」<https://www.facebook.com/shiranuikuma> のメッセージ欄
- ※10冊以上は、割引サービスがあります。

■お願い：図書館や公民館など学会誌を購入して下さるところをご紹介下さい。